

カサブランカと父

「カサブランカ」、それは古い映画のことではない。それは、花好きな母を喜ばせようと父が植えた白い百合の花のことだ。特に母はカサブランカの美しさにひかれていた。

「家でも、あの大きな花を咲かせることができるのかしら。」

母の一言から始まった我が家の球根植えも七、八年続き、今では夏を告げる大事な花となっている。

毎年十一月末から十二月にかけて、カサブランカの球根を父が鉢に植える。球根から育てるのである。今回は全部で七個、少ないほうである。父は、学生ころからラグビーをしていて、体はかなり大きいほうである。その大きな体を狭いベランダで小さく丸めて、肥料の位置や量を考えながら一つ一つていねいに植えていく。一見、辛そうな感じがするが、父の頭の中には、夏の晴れた日、美しく大きく咲いたカサブランカが描かれているかのように、顔いっぱい喜びに満ちている。

この球根を植える作業は、今では年に一度の年中行事となっている。寒い冬を越し、春になると、芽が土を持ち上げて顔を出す。カサブランカの芽は一見、丸みを帯びたこのようだが、芽はまるで冬眠から目をさました生き物のように、春の光を浴びきらきら輝きいばっている。この芽がどんどん伸び、やがて生き生きと葉を広げてくる。

父は現在単身赴任で、毎週、週末に帰ってくる。そして、カサブランカの生長を見るのだ。毎日見ている私にとつては、あまり変わっていないような気がするカサブランカだが、父の目から見ると、

「お、また伸びたな。茎もずいぶん、太くなつて。」

と、ちよつとずつ変わっているようだ。そして、私にもはつきりと変化がわかるくらいに背丈が大きく伸びて、母の肩くらいになり、茎の太さは大人の親指ほどになる。今年のカサブランカは特に大きく、きつと花も大きくなるんだらうな、と楽しみになる。

つぼみができた。家族のみんなが思っていたとおり、つぼみは一つの茎に五、六個ついていた。日を追うに従って、つぼみは家族の気持ちに伝えるように大きく生長した。つぼみの重さに耐えかね、茎がまがり始める。そのた

め、「添え木」をしてあげなくてはいけない。母は、このころになるとベランダに干す洗たく物が、つぼみにあたって折れてはいけないと、かなり気を遣うようだ。体をくねらせ、ふうつとためいきをついて干している。つぼみになるまで半年以上、ここまで大きくなったカサブランカのつぼみを落としてしまったらどうしよう。父はどんなに気を落とすだろう。そんなことを考えながら母はベランダに出るのだ。

夏の日差しが強くなったころ、緑色だったつぼみが、白く膨らみ始める。きつと、このつぼみは大きな花を咲かせるだろう。父の、つぼみを見る目は、まるで我が子の成長を喜ぶ親のようだ。

六月ころやつと、皆が待ちに待った花が咲いた。直径二十センチぐらいありそうな、大きな大きな花である。まるでシルクのような輝きを持ち、それはそれは美しい大きな純白の花が咲いた。そして、甘い香りを漂わせていた。家族皆、幸せな香りに包まれた。カサブランカがあまりにも立派な大きな花を咲かせたので、家族だけで楽しむよりはと、一つの鉢に三本植えた大きな鉢をドアの外に、父と母、二人がかりでベランダから運んだ。それは、かなりの重さになっていた。

今年も、暑かったせいかわらぬカサブランカも、ドアの外のカサブランカも次から次と咲いて、隣り近所の人たちも、

「きれいなね。毎年、楽しみですよ。」

と、声をかけてくれ、喜んでくれた。父に話すと、それがまたうれしいように、細い目をまします細くして白い歯を見せていた。

父の体格や風ぼうを知る人は、父とカサブランカの花は絶対に結びつかないと思う。でも、父の優しさや思いやりを知る人たちにとつては、夏の太陽をいっばいに浴び、美しく繊細な花を咲かせるカサブランカは、やはり、父そのものなのかもしれない。

このカサブランカの花は、甘い香りとともに私たちを笑顔にさせてくれる不思議な力をもっている。私もカサブランカの花のように、周りの友達と笑顔で学校生活を送りたい。

今では、すっかり花の終わったカサブランカ。花屋に行ったら高価な値段で、いくらでも切り花として買える。でも、十一月も終わるころ、父はまた球根を植えるだろう。狭いベランダで、体を丸め母の喜ぶ顔を思い浮かべながら、幸せそうな顔をして。